Francis P. Scott 先生の思い出

安　田　春　雄*

昨年11月1日に Francis P. Scott 先生が 68 才で他界された．ワシントン D.C. の近郊バージニア州アーリントンの自宅で早朝心臓発作におそわれ，同じ日の夕方病院で亡くなられたそうである．今世紀半ばの位置天文学の画期的大事業である AGK 3R と SRS（南天標準星）国際協同観測という両計画の委員長を先生はつとめられた．特に SRS 観測計画の開始に当っては，当時ケープ天文台以外殆んど活動していなかった南半球の子午環の再建に走り回られ，自らのワシントン海軍天文台7吋子午環をアルゼンチンに移され，ハンブルグ・プルコボ両天文台の南天遠征隊の実現にも協力され，東京を初め北半球子午環の参加を呼びかけるなど，SRS 観測の成功はひとえに先生の手腕に負う所多大であった．

1970 年にワシントン海軍天文台を停年退職された後も，AGK 3 R（AGK 3 の標準星）と SRS の観測成果を綜合し，全天に一様に分布した星の位置と固有運動を基本座標系に基いて決定するという難事業を指導されつづけられていた．その間 1971 年には，南米のベネズエラに招かれ，カジガル天文台においてアスカニヤで製作後 20 年近く放置されていた 20 cm 子午環を動かす指導にも当られた．最近の数年は，南フロリダ大学で位置天文学の講義を担当しておられ，昨年9月24日には同大学から名誉博士の称号を受けられた．今年6月頃はドイツ・ハイデルベルヒの天文計算局に招かれ，新らしい天文学の諸要請に適合した基本星表 FK 5 の編纂の基本方針決定に参画される予定であったとか．先生の突然の死は位置天文学にとって大きな損失である．

私が先生に初めて会ったのは，先生の助力でアメリカ科学財団の援助を受け，1962-1963 年にわたってワシントン海軍天文台に滞在した時であった．ワシントン D.C. のバスターミナルに迎えにこられた先生は，自動車を運転しながら天文台に着くまで一人でしゃべりまくっておられた．そして“お前の所には Lady Astronomer がいるか”とたずねられ，自分の所で働いている女性天文学者の長所を詳しく話してくれ，“お前の所でも是非採用しろ”と盛んにすすめてくれた．しかも私が天文台に滞在中早速私をその Lady Astronomer と同室（黒人女性タイピストと若い男の天文家さんの2人も同室させる配慮は忘れなかったようですが）にしてくれました．おかげで生れて初めてアメリカの妙齢の女性といろいろと雑談する機会にめぐまれました．このように非常に親切な

人で，ワシントン子午環の資料を次から次へと私の机の上に積み上げ息つく間も与えず，私の質問に非常に明瞭な英語で明快に答えてくれたのが印象的でした．そして帰りには毎日私のアパートまで自動車で送ってくれ，車中で天文学のことやアメリカの生活のことを話してくれるのが常でした．先生は背は非常に低いが精力的な感じの人で，その大声は有名で部下と大声で論じている声が2部屋以上離れた私の部屋まで鳴りひびいていました．

先生はアメリカの北端ミシガン州の片田舎の農家の子として生れたそうで，雪深い田舎での子供の頃の農事手伝いの苦労話をよく話しておられた．夫人は先生と対照的に大きく太った物静かな女性で，下世話に云う“電信柱にせみ”の感じの仲むつまじい御夫婦でした．また，先生の温厚で気さくな人柄は，ワシントン海軍天文台に勤めている若い人々に愛され，もっとも信望が厚いと，多くの若い天文家さんが話してくれた事を思い起します．

先生は 1932 年にワシントン海軍天文台の9吋子午環部門に入られ，N 30 の編纂者などで有名な H.R. Morgan の下で働き，同氏が 1944 年に退職後同部門の長となり，9吋子午環の代りに7吋子午環を作り，以後7吋子午環部門の長として停年まで活躍されました．6吋子午環の長であった C.B. Watt の死後は子午線天文学の第1人者としてワシントン海軍天文台の声価を高めるとともに，世界の子午線天文学をリードしてこられました．現在いろいろの問題に直面している子午線天文学にとって，先生の深い知識は欠かせないもので，それだけに先生の死は大きな衝撃である．

* 東京天文台